

年末商戦や「今年の流行語大賞」「今年の十大ニュース」などを見聞きすると、年の瀬を実感するものです。そのような雰囲気がある今年の後始末を促し、新しい年を迎える準備に入るための機運を高めてくれます。十二月は、大掃除などで後始末をつけ、心を整理する時期でしょう。

倫理研究所の創始者・丸山敏雄は、著書『万人幸福の栞』の「反始慎終」の中で、後始末に関する以下のように記しています。

「しりのしまりのない人々の仕事は、多く七八分まで行つて崩れる。もうだいじょうぶというところでガラリと行く。そしてこれを他人のせいにし、時勢の罪に帰せようとするが、実は、皆己の心境の反映にすぎない。

小さい事に末を乱す人は、大切な事に終りを全うしない。その極は悲惨な死様をすることにさえなるのである。(中略) 正しく生きた人でないと、美しい死に方はできぬ。見事な死にようをした人は、見事な一生を貫いた人である」

勿論、死様や死について、色々な見方や考え方があろう。周囲が不本意と感ずるような臨終を迎えた人すべてに「後始末ができていないからだ」と断定するものではないことも付記しておきます。よい生き様や死様をするための日頃の心得として、後始末の習慣を身につけることの大切さを説いているとご理解ください。

十二月十四日は、創始者の祥月命日です。昭和二十六年に逝去しましたが、臨終に立ち会った長男は、創始者のかすれる言葉を必死に聞き取ったと言います。

「急ぐな、先のことを心配するな、自然にまかせて処置をとれ、これでよい、喜べ」と、薄れゆ



## 一節毎にけじめをつけ

## 見事に生きる

く意識の中、後に残る者達に対して、示唆と慈愛に満ちた言葉を残して旅立ちました。

見事な一生を貫きたいと念じ、実践した人だからこそその人生の集大成の言葉であり、最後の後始末とも解釈できる言葉ではないでしょうか。

後始末とは具体的に、行為の面からみれば、次の準備や段取りのために用具の手入れや後片づけを行ない、挨拶(式)をすることです。一方、心意の面からみれば、気持ちに終止符を打ち、心残りをなくして一区切りをつけ、感謝して慎んで終わることです。

後始末の実践のポイントは、①緊張を緩めない。②素早く行なう。この二つです。ぐずぐずしていたのでは後始末にはなりません。先人たちの経験から生まれた諺や格言に、「勝つて兜の緒を締めよ」「終わりをよければ全てよし」とあるように、後始末の重要性を、後世に伝えていきます。

物事を始める時には誰しも緊張感を高め、注意深く動きますが、いつの間にかマンネリ化して終わりは投げやりになることもあります。

こう考えると、準備と後始末は別物として扱うのではなく、両輪で扱うべきものなのかもしれません。準備段階から後始末まで緊張感を保つことが、より良く生きるためには不可欠だからです。

それには、受けた恩を忘れず、起床時や始業時、終業時や就寝時に、一区切りつけるための感謝の挨拶(式)をしてマンネリ化を防ぎましょう。

今日もゴールを見据え、緊張感をもって準備と本番に臨み、慎んで心残りなく一シーン毎に挨拶(式)をして、感謝報恩の働きができるよう後始末をしましょう。この反復によって一年の後始末や、その先の自身の生き様につなげたいものです。